

2 育てるカウンセリングを生かした対話のある授業の実際

「競い合う二つの権力－武士の悲願とは何だったのか－」（第6学年）

（1）「思考力」とその育成に向かう対話

【単元で育成したい「思考力」】

武士がどのように権力を掌握したかを調べ、時間的・空間的視野や立場を広げることで事象相互を関係づけ、その支配体制と人々の生活の変化を捉え、武士の世が始まったことについての解釈を再構成する力

【「思考力」の育成に向かう対話】＜収束型＞

さまざまな権力闘争の様子やそこに携わる人々の思いや願いを明らかにしながら、より多くの事実を基にして、勢力拡大や滅亡の原因を話し合う。

平安時代末期から鎌倉時代の「武士の世の始まり」は、力をつけてきた武士が、自分の土地を守ってくれる支配者を選びながら徐々に武士の世を創っていった時代と捉えていくことが大切である。そのために平氏や源氏、北条氏が権力を掌握していった経過だけでなく、後醍醐天皇により鎌倉幕府が滅ぼされた時代へも時間的視野を広げていった。また、空間的視野を広げて支配者の勢力範囲を知ったり、立場を広げ支配者層の武士だけでなく、被支配者層の武士や天皇や貴族等の関係にも目を向けたりしていった。そうすることで、平氏と北条氏から支配者が滅びる構図を捉え、源頼朝や鎌倉幕府滅亡の様子から被支配者層の武士が何を望んでいたのかを理解することができると考えた。このように「繁栄」と「滅亡」を繰り返し捉えさせながら、支配者が強大な力を持ち武士による盤石な政権を創ったという解釈から、武士が自分の土地を守ったり広げたりしたいという思いや願いを実現するために武士による世が創られていったという解釈に再構成されていくことをねらったのである。

そのために支配体制や生活の変化だけでなく、そこに携わる人々の思いや願いを明らかにしながら、より多くの事実を基にした収束型の対話を行った。上記対話を通して、武士は支配者がだれかではなく、自分の土地を保証してほしいという願いを実現してくれる人を支配者として選んでいることを捉えられると考えた。

（2）対話への支援

① 多様な考えが表出される教材

～思考の一部分に焦点を当て、それらの表出を促す～

実態：各支配者が行ったことを個々に明らかにし、武士の世の始まりについて考えていくと、前の時代や他の人物などと関係づけることが難しい。

支援：武士の世の根幹である土地に焦点を当て、単元を通して土地に対する武士の思いや願いを考えさせた。各支配者の学習後に被支配者や天皇との関係、繁栄や滅亡の原因を「栄枯盛衰図」にまとめられるようにした。その「栄枯盛衰図」に土地に対する思いや願いも書き加えさせながら学習を進めていった。

② 育てるカウンセリングを生かした支援

ア 本単元内で直接行う支援

実態：社会科では、「この問題が起こった原因は何だろう」「この方法で行った結果、どうな

ったのだろう」というように因果関係で物事を見ていくことが多い。そのため友達の意見に対して疑問をもち、そこから深めていくことが大切である。しかし、学級で行った対話に関するアンケートでは、自分の発言に対する質問や反論に答えられないことを、発表しない理由としてあげる子どもが多かった。

支援：友達から言われた疑問に対して一人で答えられない場合には、生活班で助け合って考えたり、全体で考えたりしてもよいことを前もって伝えておき、安心して発言できるようにした*1（対話の雰囲気）。

イ 本単元外での活動を想起・活用させる支援

実態：Q-Uによる調査によれば、本学級には自由に話し合う雰囲気はあるものの、侵害を受けていると感じている子どもが数名おり、話し合いでもトラブルを恐れ発言できない様子が見られた。

支援：話し合いが、発言力のある子どもだけで進まないように、順番に発言し全員に機会を与えたり、一人が発言したら他の人が質問し、疑問を解決しながら進んだりさせた*2（対話の技能）。それを基にして、各班ごとに自分たちに合った話し合いのルールや方法を考え、それを身につけさせておくことで、授業で想起・活用できるようにした。少しでも発言しやすくするには、ふだんから関わる機会が多く、人間関係を考慮し編成した生活班の4～5人で話し合い活動を行うのが効果的であると考え*3、すぐに相談できるという安心感をもたせるようにした（対話の雰囲気）。

（3）本実践における授業の実践

場面	授業づくり	実践の詳細
学習問題の設定		<p>前時までに元の侵略を防いだこと、これまで手をつけられなかった土地からも兵糧徴収ができるようになり幕府の力が強くなったことを学習してきた。本時は、その幕府が1333年に滅びた事実から、子どもの認識にずれが生じ、「なぜ、力をつけた鎌倉幕府が滅んだのか」という学習問題が設定された。</p>
多様な考えの表出	<p style="text-align: center;">なぜ、元寇によって力をつけた鎌倉幕府は滅びたのだろう</p>  <p style="text-align: center;">【栄枯盛衰図】</p> <p>補助黒板には、本時までに学習してきた平清盛、源頼朝、承久の乱時の北条氏の繁栄や滅亡の様子</p>	<p>子どもたちには、自分の選択した視点で滅びの原因を考えられるように「栄枯盛衰図」の支配者と武士の枠だけを残した「視点整理シート」を配布した。子どもたちは、</p>  <p>【視点整理シートの活用】</p> <p>幕府が滅びた理由として最も関連があると思われる支配者や被支配者の枠に自分の意見を書き込んで</p>

*1 …99頁参照

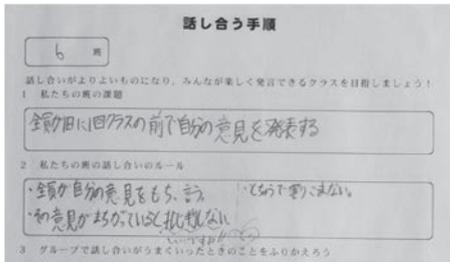
と土地に対する思いや願いをまとめた「栄枯盛衰図」を掲示しておく（教材）。

いった。平清盛とつなげて考え始める子どもが多かったが、栄枯盛衰図を活用し「源氏のように跡継ぎが途絶えた」「北条政子のように武士のことを考えないといけない」等、一つの支配者だけでなく他の支配者にも時間を広げて考えることで多様な意見が表出された。

グループ対話

「栄枯盛衰図」を活用して考えたものを基に、元寇後に鎌倉幕府がおかれた状況と各氏族の繁栄や滅亡とをつなぎながら、滅亡の理由を生活班の4人で話し合わせた*3（雰囲気）。

朝の活動で考えた話し合いのルールを意識して話し合いを行うように助言した*2（技能）。



【話し合いのルール】

各班に配られた「栄枯盛衰図」を使って、どの視点からの意見なのかを明確にしながら話し合っていた。



【栄枯盛衰図を活用しての対話】

- C1: 平氏と同じで武士たちに土地を与えなかったからだと思います。
- C2: C3さんはどう思いますか。
- C3: 貴族と同じように土地を守ってくれなかったからだと思います。
- C2: C1さんと同じですか。
- C3: 少し違います。

このように司会者を中心に発言する等、班で決めたルールに沿って全員が発言できていた。

全体対話



【子どもの発言を構造的に板書】

視点整理シートに書いた子どもの考えと板書がつながるようにした。土地に関する被支配者の思いを引き出しながら支配者の下側に発言内容を書くようにした。

「幕府が減じた理由は御恩と奉公の関係が崩れたからである。御恩がないことは武士にとっては辛いことだが、敵が外国だったので北条氏も武士に与えたくても与える土地が

グループで一度発言し自信をつけていたために、全体対話でも自信をもって発言できた。

- T: 平氏の視点で考えている人が多かったので、そこから始めましょう。
- C4: 平清盛と元寇後の北条氏は似ています。
- C5: こんな支配者にはついていけません。
- C6: 源氏のように土地をくれないと嫌です。
- T: 承久の乱の時はどうでしたか。
- C7: 北条政子の時は御恩をたくさんくれたのでうれしかったです。
- C8: 奉公をするのは御恩があるからだと思います。
- T: 頼朝や政子のころは御恩と奉公の関係があったんですね。
- C9: やっぱり土地が大事です。
- C7: 北条氏も土地を与えると約束したけど与えられませんでした。
- C8: 元寇では土地が手に入らなかったから、しかたがないんじゃないかな。

北条氏が元寇後も土地を増やし続けていることを

全体対話

なかったからしかたがない。」と子どもたちの意見が、北条氏擁護の意見に収束しかかった。そこで、元寇後も自分たちの土地を増やし続けた北条氏の支配地拡大図を提示し、当時の武士が北条氏に対してもった思いを捉えさせた。



【北条氏の支配地拡大の様子】

知った子どもたちは、当時の武士の気持ちになって「ずるい」「裏切られた」と怒りをあらわにし、「信用を失った幕府は滅びる」という意識になった。しかし、「強大な力をもった北条氏をどのように倒したのか」という壁にぶつかった。時間的視野を広げ、「平氏に不満をもった武士たちは源氏と共に平氏を滅ぼしたけど、今回は誰の下に集まったのかな」と話し合い「土地を守ってくれる人の下に集まったのではないか」と意見が出された。そこで年表を使い、後醍醐天皇の下に武士が集結し幕府を滅ぼしたことを確認した。武士の世が始まったこの時代は、次々と支配者が変わったことから、土地を守って欲しいという武士の願いを実現していった時代であることを捉えていった。

(4) 考察

① 成果

土地に焦点をあて、支配者や被支配者の思いや願いをまとめた「栄枯盛衰図」を用いることで鎌倉幕府滅亡時の武士の土地に対する思いや願いとつないで考えることができた。そして、武士の世は支配者が創ったものではなく、土地を守って欲しい、増やしたいという被支配者の武士たちによって創られたものだという捉えをすることができた。

子ども	授業開始時の考え	授業の終末での考え
i	・武士の信用をなくしたから滅びた。	・新しく土地を守ってくれるリーダーの下に集まったから滅んだ。
ii	・武士に土地を与えなかったから滅びた。	・北条氏が土地を独占したから、他に自分の土地を守ってくれる人に従った。

上記の子どもの様相から、対話の前後で武士の世に対する解釈に変容が見取れ、「思考力」の向上が見られたと言える。

② 課題

後半の話し合いが活性化したのは「元寇によって北条氏も土地を得られずに力を弱めた」という子どもの認識と「北条氏は、元寇後も支配地を広げ力を強めた」という事実とのずれから、「なぜ北条氏だけが」という疑問が生じ、「元寇で力を弱めた武士たちは、強大な北条氏をどうやって滅ぼしたのか」という子どもたちが追究したい問題へとつながっていったからである。対話に向かわせるためには子どもが追究したい学習問題の設定が必要不可欠であり、前時まで子どもがどのような認識をもっているのかをきちんと把握することが大切であった。

対話への支援では、普段からさまざまな活動を共にし、気心の知れた生活班で話し合いを行うことが効果的であった。課題としては、4人で話し合える時間をできるだけたくさん確保する必要があるということである。全体対話で雰囲気やよどんだり、子どもたちが自分の意見に自信をもてずに同じ班の人と相談したいという必要感をもったりしたとき、子どもたちからその要求が出せるようにしたり、すぐに話し合いの時間をとったりすることが大切だと考える。